

信仰義認は、パウロの手紙の中に顕著にみられる思想です。パウロは、人は律法をおこなうことで義とされるのではなく、キリストへの信仰によってのみ義とされると説きます。神さまはイエス様の十字架の死を通して、わたしたちを罪の鎖から解放し、義としてくださった。そのことを信じるかどうかが大切なのです。

またパウロは「信仰の父」と呼ばれるアブラハムについても、神さまの約束を「信じて」義とされた側面を強調します。当時のユダヤ教では、アブラハムはイサクをささげようとする「行い」によって義とされたという考え方が一般的でした。しかしパウロは、「アブラハムは神を信じて、義と認められた」(創 15 章 6 節)という言葉を通して、信仰義認を説明します。

信仰義認とは逆に、人は善い行いをすることで神さまから義とされるという考えを「行為義認」と呼びます。16 世紀の初頭に宗教改革をおこなったルターは、その当時のローマカトリック教会の腐敗は行為義認に由来するものであると考えます。そして「聖書のみ、信仰義認、万人祭司」という三大原理を根幹としたプロテスタント信仰が生まれていきます。

わたしたちは、行いを通して神さまに近づくことはできません。それは、毎日の自分の姿を振り返ってみると、よくわかります。どれだけ善い行いをしようとしても、心の中に悪い思いが浮かんだり、人を傷つけたり、自分勝手に歩んだりしている、弱い自分に気づかされます。

「神さま、こんな罪深いわたしを何とかしてください」という叫びが、わたしたちの信仰と認められ、わたしたちは義とされていく。その恵みを頂いて、少しでも神さまや隣人にお返ししていくのが、わたしたちに求められていることなのではないでしょうか。

次回は「信仰告白」です。お楽しみに。



「神の使いを迎えるアブラハム」
ギュスターヴ・ドレ
(1832～1883 年)

なぜなら、わたしたちは、人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考えるからです。

(ローマの信徒への手紙 3 章 28 節)

